

入学式式辞 2018

まず本日入学された 293 名の新入生の皆さんに、純美禮学園滋賀短期大学の教職員を代表しての心から歓迎の気持ちをお伝えしたいと思います。ようこそ滋賀短へいらっしゃいました。これから皆さんにとって、そして私たち教職員にとっても充実した楽しい 2 年間をいっしょに過ごすことができるように願っています。そして本日ご列席の新入生のご両親やご家族にも入学おめでとうございますと申し上げ、本学にお子様たちを入学させていただいたことにお礼を申し上げます。大学生ともなれば家族から独立して生活し、キャンパスライフをおくっていくように思いますが、いろいろな面でご家族からご支援いただき、大学と一緒によりよい勉学を進めていくことも必要になっております。ご家族の中にはこの滋賀短を卒業された方もいらっしゃるかもしれません。新入生と同様、これからの 2 年間をご一緒させていただくようお願い申し上げます。

さらに本日、ご多忙の中をこの日のためにご参列いただいております、県会議員山本進一様はじめ多数のご来賓の皆さまにも厚く御礼申し上げます。今後とも本学へのご支援ご鞭撻をたまわりますよう改めてお願い申し上げます。

さて本日は校門の桜も満開であります。大学への道みち、ご覧いただいたように、びわ湖から遠くに見える山並みを背景に、桜が咲き誇る風景はまことに見事であります。江戸時代に俳聖芭蕉はこよなくこの風景を愛し、晩年、この地に幻住庵という庵を結び、そこで幻住庵記という文章を記したことは有名であります。この美しい湖南の丘に立地している純美禮学園は、本年で創立以来 100 年を迎えます。短期大学としては昭和 45 年(1970 年)の創立ですので、48 年余ですが、その前身からはかると 100 年を数えます。

学園は大正 7 年(1918 年)大津に設置されました「松村裁縫速進教授所」という学校をもって学園の創立としております。創設されたのは中野富美という方で、明治 16 年(1883 年)に滋賀県栗太郡(現在は草津市)に生まれ、小学生のころから裁縫に打ち込まれ、京都や東京で裁縫の勉強をし、女子において家庭婦人として、また一人の人間としての修養には裁縫というものが非常に大切であると考えられて、大正 7 年 4 月に大津市の下北国町(現在の三井寺町)に松村(のちに大津)裁縫速進教授所を開設したのです。松村というのは富美先生が中野を名のられる前の姓で、ご臨席の松村理事長はそのお孫さんに当られます。

その時、この教授所では、単なる技術の錬磨だけではなく、それを通じて堅実な精神を

もって社会で生きてゆく婦女子を養成することを教育方針として掲げております。ちょうどこのころは、明治から大正に時代は移り、産業化の中で時代は大きく変化していこうとしていたころです。明治になってそれまでよりも女性の社会進出もある程度進みましたが、女性が手に職をつけて暮らしていく、とくに家庭人として一家を支え、子供を育てていくことは決して容易ではなかったはずですが、その中で裁縫教授所、今でいう専門学校ですが、その職業教育を通して女子の生き方を変えていこうという理想を持っておられた富美先生は、いわば女子職業教育のパイオニアと言っていいと思います。ここに本学園の建学の精神と言われております「心技一如」の原点があり、ここを学園の創設とする所以でもあります。その後は女子職業教育の場として着実に発展し、戦後には新制高等学校として大津家庭高等学校、やがて滋賀女子高等学校となったのでございます。これが現在の附属高等学校の前身であります。実は富美先生も、さらに短期大学設置を志しておられたようですが、残念ながら昭和 41 年になくなりました。その直後、昭和 45 年（1970 年）に滋賀女子短期大学が開学したわけでありまして。なお平成 20 年（2008 年）には共学になっていきます。

100 周年に当たるということもあり学園の歴史をすこし詳しく申し上げましたが、それは皆さんにもこの歴史に込められている意味、精神というものを共有してほしいからであります。生活学科でお菓子を作るにしても、幼児教育保育学科で幼稚園の先生になるにしても、ビジネスコミュニケーション学科で医療事務を目指すにしても、着実な職業を通じて社会で実践的な力を発揮し、そして自分の周囲の人たち—それは職場の人であったり、家族であったり、地域の人であったりするでしょうが—ときずなを深め豊かな暮らしを実現していくというのは、まさにこの 100 年間、本学園が培ってきたものであります。

本年は本学園にとって 100 周年であります、同時に明治 150 周年にもあたります。明治維新というと、大河ドラマに出てくるような話が思い起こされがちですが、そのなかから私たちの生活や文化が社会の基盤からどのようにして生まれてきたのかを考えると、この職業教育という分野は大きな意味を持っていると思います。明治から 50 年たった大正 7 年（1918 年）がどのような年であったのか、少し年表をみますと、1914 年に始まった第一次世界大戦がようやく終わりに近づき、11 月になってドイツが降伏します。世界は実に不安定な時だったのです。日本ではコメ騒動が起こったり物騒な事件もありますが、その前後に松下幸之助さんが松下電器を起こしたり、明治製菓ができた、森永ミルクチョコレート

ートが発売されたりとか、新しい社会の動きも見られます。そんな時に本学園が創設されたということは、社会の動きを先取りしていたものでありますが、それから 100 年を迎える今日、次のステップをどうするかに取り組む必要があると思われます。皆さんはまさにその転換期に入学してきた幸運児であります。

もうひとつ申し上げておきたいことは、純美禮学園という学園の名前です。もともとこれは大津裁縫速進教授所の時代に、同窓会を純美禮会と称したことから始まっています。純美禮(スマイレ)は当時の大正天皇の皇后である貞明皇后の詠まれた歌「うつふして匂う春野の花すみれ人の心にうつしてしかな」からとったといわれていますが、スマイレという花は華やかではないけれど、頭を垂れて清らかに佳凜な姿で咲いているところから、世の中のもっとも基本的なところで仕事をしていく女性を象徴する花としてその会の名称にされたものであるといわれています。そのために敢えて純粹、美麗、礼節という 3 つの徳目を代表する文字を当て、スマイレと」読ませているわけです。学章も S 字の白は純を、真ん中の赤は美を、まわりの紫紺は礼を表しています。

スマイレの花言葉は、紫色の花は「誠実や真実の愛、ささやかな幸せ」など、白色は「誠実、謙遜、あどけない恋、無邪気な恋」など、黄色は「慎ましい幸せや田園の喜び」などといい、いずれも「奥ゆかしい誠実さ」というものを基本にしています。(芭蕉の野ざらし紀行にある有名な「山路来てなにやらゆかしスマイレ草」が典型でしょうか) これは西洋でも同じのようで、「道の片隅で人知れず凜と咲く姿」がイメージされていると言われています。

ところで 2003 年、槇原敬之が作って、スマップが歌った「世界に一つだけの花」の中に、「そうさぼくらは世界に一つだけの花。一人一人違う種をもつ。その花を咲かせるだけに一生懸命になればいい。小さな花や大きな花。一つとして同じものはないから。ナンバーワンにならなくてもいい。もともと特別なオンリーワン」という一節があります。

これは大変評判になりましたが、一般には、競争してナンバーワンを求めるよりも、個性をもったオンリーワンになればよいという意味だとされています。今のスマイレの花にたとえれば、スマイレは花の中で目立って一番になろうとするような花ではない、しかしその佳凜さは何物にも代えがたい美しい個性である。それこそオンリーワンであるというようにいえるかもしれません。

しかし私はあまり簡単にそのようにナンバーワンよりオンリーワンに価値がある、というように言うのは間違っているのではないかと考えています。今のスマイレでいえば、スマイレは確かに花の女王などと言われる花ではありません。しかし仮に花の女王をバラとして、バラとスマイレを比べてバラがナンバーワンでスマイレはオンリーワンなのだと行って済ませるのでしょうか。まず花の個性と言っても、バラやランのように豪華な色合いや流麗な形を愛でる花がある一方、スマイレやランでも和ランのようにひっそりと草むらに埋もれているような佳凜さを貴ぶ花もあって、どちらが上だとは言えないというのではないのでしょうか。そしてそのような佳凜さを求める人にとってスマイレはまさにオンリーワンであり、そしてその佳凜さを高めることによってスマイレは花のナンバーワンになるのではないのでしょうか。

個性の尊重ということは決して悪いことではありません。しかし個性をありのままに認めること同時に、それを磨き高めていくことも必要です。教育とはそのためにあるものだと思います。皆さんは今ままで一人一人オンリーワンです。しかし皆さんもこの大学に何か夢をもって入ってきていると思います。その夢を実現することでナンバーワンになれるのではないのでしょうか。ナンバーワンになれなくてもいい、しかしナンバーワンになるために努力して汗をかく、いい意味での競争の中で自らを鍛え磨いていく、それが充実した人生であり、まわりの人もそれを尊いと思う。このことは仕事でも勉学でもスポーツでも同じではないのでしょうか。

これからの2年間、皆さんの夢の実現を目指してがんばってください。私たちもがんばります。

平成30年4月3日

滋賀短期大学 学長 秋山元秀